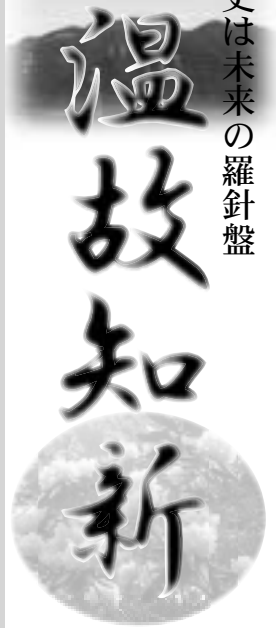


歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第二巻「文化財編」は平成一八年度末に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思います。

今回は、最近の日野町内における文化財調査によって現存が確認された釣鐘について紹介します。

日野町の梵鐘と喚鐘

私たちが釣鐘を身近に感じるときはいつでしょうか。毎年、大晦日の夜に除夜の鐘突きが行われています。この大きな鐘を梵鐘といいますが、一方やや小ぶりでお堂の軒下に掛っている鐘を喚鐘といえます。現在、日常的に使われることはなくなりましたが、法要などでその響きを聞くことができます。

こうした鐘は、溶かした金属を、あらかじめ作られた形に流し込んで製作されます。これを鋳物といいますが、その専門技術をもった職人を鋳物師といいます。鋳物師は、梵鐘のみならず武器や各種の器・像・鏡・鍋・釜などを作り、その始まりは平安時代に遡ります。

梵鐘には、鋳造の由来と功德を

述べた銘文が刻まれている場合が多く、作られた経緯を知る手がかりとなります。とくに、江戸時代になると産業・商業が発達し、数多くの梵鐘が作られました。その大部分は、六十年前の戦争に供出され鋳潰されてしまいました。しかし幸いにも日野町内には、戦後返却されるなどして寺院に戻った江戸時代の銘文をもつ梵鐘が十数点、喚鐘が二十点近くを数え、現存しています。

さて、鐘銘には先に触れた鋳物師の名が刻まれています。近江国には、いくつかの地域に鋳物師の拠点がありました。彼らは出店をもち、全国へと活躍しました。江戸時代後期の『諸国出職明細鑑』によると、当時活動していた鋳物師の拠点として、蒲生郡八日市金屋村（東近江市）・栗太郡辻村（栗東市）などをはじめ九か村が記録されています。

この記録によると、町内には、

金屋村・辻村・三俣村（東近江市）
・寺庄村（甲賀市）の鋳物師の作品があります。そのほか、愛知郡長村（愛荘町）、京都三条釜座、大坂高津、伊勢庵芸（安全寺）の鋳物師が作製した作品もみられます。

では、鐘銘にはどのような内容が刻まれているのでしょうか。次に紹介するのは、大窪の永福寺に伝わる喚鐘の銘文です。

享保十二丁未歳八月奉鑄之
然宝曆六丙子蠟月十八日依
類焼堂宇一時成灰燼而時將焼
損此故後悔之今年助旧而
新戸再建江苧蒲生郡日野牧
藤性山永福寺什物現住願
應維時宝曆十一辛巳夏六月
日願主大窪裏町夜念仏
連中同郡金屋村冶工田中
傳六藤原家春作

この銘文によると、享保十二（一七二七）年に作られた鐘が、宝曆六（一七五六）年の火災で損傷してしまっただけで、これを悔やみ宝

暦十一（一七六一）年、順應の時に、大窪裏町の夜念佛連中が願主となって注文し、蒲生郡金屋村の鋳物師田中傳六がこの鐘を鋳造した。という内容が読み取れます。

日野町の中心部が大きな打撃を受けた、宝曆六年の大火の記録がここにも残されているのです。私たちの身近にある文化財は、紙や木材・染織など脆弱なものから、石や金属のような堅牢なものまで様々です。堅牢な文化財も、火災やその他、人の手による破壊によって損なわれることがあります。可能な手をつくして、これらを次の世代に渡してゆきたいものです。



◀永福寺の喚鐘（大窪）